

日本哲学会林基金若手研究者助成報告論文

カント哲学における世界概念の総合的解明

—「複合体 (compositum)」と「系列の全体性 (Totalität der Reihe)」—という世界の二つの側面に即して—

増山浩人 (北海道大学)

はじめに<sup>1</sup>

本報告では、カントの世界論が従来考えられてきたよりも多くの問題を論じる理論であることを明らかにする。そのために、「複合体 (compositum)」と「系列 (die Reihe)」という世界の二つの側面に着目する。「複合体」として考察された場合、世界は無数の相補的な実体からなる統一的な全体として位置づけられる。これに対し、「系列」として考察された場合、世界は、今ここを起点にして、隣接する空間・時間的な部分を継的に辿り続けた結果として得られる全体として位置づけられる。

多くの先行研究において、カントの世界論は主に『純粋理性批判』のアンチノミー論に依拠して考察されてきた。アンチノミー論の主題は、「世界に始まりはあるのか」、「物質の最小構成要素はあるのか」といった世界の諸原理に関する問題である。そして、今、ここを起点とする空間・時間的な系列を遡及することでこれらの問題を答えようとする際に陥る矛盾点とその解決法を指摘することがアンチノミー論の狙いである。この点で、アンチノミー論は、「系列」としての世界に関する難問を論じるための理論だといえる。この点を受けて、多くの研究では、カントの世界論はもっぱら「系列」としての世界を論じるための理論として位置づけられてきた<sup>2</sup>。

これに対し、本報告では、カントが「複合体」としての世界に関する哲学史上の難問にも取り組んでいたことを明らかにする。その難問とは、いかにして無数の実体が一つの相補的な全体を形成するのかという問題、つまりいわゆる「世界の統一 (die Einheit der Welt)」の問題である。この難問に多くの近世哲学者が熱心に取り組み、その結果として提唱されたのが、マールブランシュの機会原因説やライプニッツの予定調和説であった。したがって、カントの「世界の統一」の問題に対する取り組みに着目することによって、従来とは異なる角度からカントの世界論の哲学史的意義とその独自性を明らかにすることができる

---

<sup>1</sup> カントとバウムガルテンの著作からの引用はアカデミー版カント全集から行う。その際、アカデミー版カント全集の巻数をローマ数字で、頁数を算用数字で示す。ただし、『純粋理性批判』からの引用は、第二版を B とし、頁数を算用数字で示す。また、引用文中のゲシュペルトとイタリックは傍点で、スモールキャピタルは《 》で示す。

<sup>2</sup> その代表格としては、Marzkorn, W., *Kants Kosmologie-Kritik. Eine formale Analyse der Antinomienlehre*, de Gruyter, 1999. が挙げられる。同書の 1~3 ページで、彼は、本来理念でしかない「系列」としての世界を所与のものとなした場合に生じる矛盾を暴露した点にこそ、カントの伝統的世界論批判の意義があると説明している。

はずである。

議論は以下の順序で進められる。まず、1.と2.で、前批判期の著作や形而上学に関するカントのメモや講義録から、カントが世界を「世界の質料」、「世界の形式」、「世界の全体性」という三つの観点から考察していたことを確認する。さらに、3.では、『純粹理性批判』の「第三類推論」を「世界の統一」の問題を論じるための理論として位置づける。このことによって、カントの世界論が、「複合体」と「系列」という二つの観点から世界を考察するための理論であることを明らかにする。

## 1. 世界を考察する際の三つの観点 — 「世界の質料」・「世界の形式」・「世界の全体性」 —

この三つの観点から世界を考察している代表的なテキストとしては、1770年の著作『可感界と可想界の形式と原理』（以下、『就職論文』）の冒頭部を挙げることができる。同書2項の冒頭部で、カントは、「世界の定義の際に注意されなくてはならない諸契機」（II 389）として、「超越論的な意味での質料 (*materia (in sensu transcendentali)* )」、「形式 (*forma*)」、「包括性 (*universitas*)」の三つを挙げている。カントによれば、「質料」とは「実体と見なされた諸部分」、「形式」とは「諸実体の同位的秩序」、「包括性」とは「共存する諸部分の絶対性一切性 (*omnitudo compartium absoluta*)」であるという (Vgl. II 389-392)。このことから、「世界の質料」は複数の実体、「世界の形式」は実体間の相互関係、「世界の包括性」は世界を構成する諸部分の全部、と位置づけることができるだろう。

さらに、1769年終盤から1770年の秋頃に書かれたとされるカント直筆のメモにおいても、これらの三つの観点について以下のような説明がある。「世界の概念には以下のことが属する。1. 質料的なもの、つまり実体の複数性。唯我論的世界は世界ではない。2. 形式的なもの、つまり全体を構成する限りでの諸実体の実在的連結、同位的秩序（その原因のもとでの従属的秩序ではない）。3. 否定的に規定された関係、つまり他の全体の部分ではないこと。あるいは全体性」（XVII 454）。三つ目の観点が「包括性」から「全体性 (*Totalität*)」という類義表現に言い換えられている点を除けば、この説明は、『就職論文』の上記の説明とほぼ一致する。

こうした説明は、1770年代後半のものとされる『形而上学 L1』の「世界論」の冒頭部 (Vgl. XXVIII 195)、1782年～83年頃のものとしてされる『ムロンゴヴィウスの形而上学』 (Vgl. XXIX 851)、1790年代のものとされる『ドーナ形而上学』 (Vgl. XXVIII 657) といった講義録にも見出される。このことから、前批判期から一貫して、カントは「世界の質料」、「世界の形式」、「世界の全体性」という三つの観点から世界を考察していたといえるだろう。

## 2. 以上の三観点の導入の目的

とはいえ、カントがこの三つの観点から世界の考察を試みたのはなぜなのだろうか。以

下では、この点を公刊著作である『就職論文』の記述にそくして確認していこう。

まず、「世界の全体性」に関する問題を見ていこう。『就職論文』の2項でカントが論じているのは、世界の絶対的全体性を把握することの困難さである。その理由を、カントは、「永遠にわたって互いに継起しあう宇宙の諸状態の決して完結することない系列が、どのようにして一括してあらゆる変化を包括する全体へともたらされうるかを理解することが困難だからである」(II 391)と述べている。系列の背進を続けることができる以上、現時点で到達した系列の全体は他の系列の部分でしかありえない。それゆえ、終項を欠く系列という概念は、他の系列の部分ではないという絶対的全体性の要件を満たすことができない。したがって、世界概念には、無際限性と完結性という二つの両立不可能な性格が含まれていることになる。この問題は、『純粹理性批判』の「第一アンチノミー」でも論じられる難問である。

次に、カントが「世界の質料」を論じる際に留意したのは、世界を単一の実体とみなす「唯我論 (Egoismus)」を回避することであった。この点について、『就職論文』の2項で、カントは「したがって、いわゆる唯我的な世界は唯一の単純実体とその偶有性とのみで構成されているのであって、想像的な世界であればともかく、世界と呼ばれるには適切ではない」(II 389)と述べている。カントが、世界論との関連で「唯我論」という語を使用する際に念頭においているのは、スピノザの実体一元論である<sup>3</sup>。したがって、カントが「世界の質料」を「実体とみなされた諸部分」(Ebd.)と定義したのは、世界が単一の実体ではなく、無数の実体からなる「複合体」であることを示すためなのである。

最後に、「世界の形式」を論じる際にカントが目指していたのは、世界を構成する諸実体間に因果的な作用関係はないとみなす予定調和説や機会原因説を退けることであった。この点は、世界を構成する無数の実体の相補関係、つまり実体間の「同位的秩序」が観念的で主観的ものではなく、実在的で客観的なものでなくてはならない、という『就職論文』2項の議論から裏付けられる (Vgl. II 390)。予定調和説の支持者は、世界の実体間には、「観念的影響 (influxus idealis)」関係があると主張していた。彼らによれば、ある実体が世界に属するためには、① ある実体は自らの状態を自らの力で変化させる、② それでもこの実体の状態の変化の理由は他のあらゆる実体にも見出される、という二点が満たされれば十分なのである<sup>4</sup>。これに対し、カントは、世界を構成する実体間には、「実在的影響

---

<sup>3</sup> この点に関しては、いくつかの典拠が挙げられる。まず、1770年代後半のものとされる『形而上学講義 L1』では、「しかし、独断的唯我論 (der dogmatische Egoismus) は隠れたスピノザ主義 (ein versteckter Spinozismus) である。スピノザはただ一つの存在者しか存在せず、残り全ては一つの存在者の変容であると述べている」(X XVIII 207)という記述がある。さらに、1764年～1766年頃のものとしてされるあるメモには「全てのスピノザ主義者は唯我論者である」(X VII 297)という記述が、1778年頃のものとしてされる別のメモには、「唯我論がスピノザ的であるのは、唯我論が独断的に擁護される場合である」(X VIII 170)という記述がある。

<sup>4</sup> 例えば、バウムガルテンは、「観念的影響」を「他の実体によって影響を及ぼされる実体の受動が同時に受動する実体の能動である場合、《受動》と《影響》は《観念的》と呼ばれる」(X

(*influxus realis*)」関係、つまり、因果的な作用関係がなくなると主張する。カントが、世界の実体間の関係を「物理影響説 (*systema influxus physici*)」に基づいて説明するのもそのためである。

しかし他方で、カントは従来の物理影響説をそのまま支持したわけでもなかった。この点について、『就職論文』の 17 項で、カントは「まさしくここにこそ、その通俗的な意味における物理影響説の最初の誤謬がある。つまり、物理影響説は諸実体の相互作用と移行する力を、諸実体が現存することによってだけで認識できると根拠もなく想定しているのである」(II 407) と述べている。実体は定義上、他の存在者から独立して現存する。それゆえ、複数の実体が現存するだけでは、これらの実体が相補関係にあることは帰結しない。つまり、カントは、実体が他に依存しないものであるということが十分に考慮されなかった点に従来の物理影響説の欠陥を見出していたのである。だが他方で、カントは、この欠陥を取り除くことができれば、「我々は、唯一実在的と言われうるに値し、世界の全体が実在的であり、観念的でも想像的でもないと言われるに値するような相互性を持つ」(Ebd.) とも付け加えている。このことから、カントが「世界の形式」を論じる際の一番の関心事は、実体間の相互関係の説明原理としての物理影響説を改善することであったといえるだろう。

以上のことから、カントの世界論は、「複合体」と「系列」という二つの観点から世界を考察する理論だということができる。つまり、「系列」としての世界を論じる際には、世界の始原や原理を理解するための困難さが問題となり、「複合体」としての世界を論じる際には、無数の実体が一つの世界をなすための根拠が探求されるのである。

この点を踏まえ、以下では、『純粹理性批判』の「経験の類推」、特に「第三類推論」を手がかりに、カントの「世界の統一」の問題に関する取り組みの特色を明らかにしたい。

### 3. 世界論としての「第三類推論」

まず、「第三類推論」の概略を確認しておこう。この章は、実体の持続性を論じる「第一類推論」、一般因果律を論じる「第二類推論」とともに、『純粹理性批判』の「原則論」の「経験の類推」の一部をなしている。「第三類推論」の狙いは、「空間において同時に知覚されうる限りでのあらゆる実体はあまねき相互作用のうちにある」(B257) という原則が経験の可能性の条件をなしていることを証明することである。カントは、① 我々は複数のものの同時存在の経験を現に保有している、② しかし、この経験が成り立つためには、実体間の「相互性」、あるいは「相互作用」という悟性のカテゴリーが不可欠である、という

---

VII 71) と定義している。それはちょうど、教師と学生との関係になぞらえることができる。というのも、教師の講義は学生が新たな知を身につけるための機会因にはなるが、その知を自らのものにするのはあくまでも学生の能動的な勉学によるからである。この例については、Meier, G. F., *Beweis der vorherbestimmten Übereinstimmung*, Halle, 1743, §.12. S. 25f. を参照のこと。

二つのステップを踏んでこの原則の妥当性を証明している。このように、「第三類推論」は、先行する「第一類推論」、「第二類推論」とともに、カントの経験の理論の中核をなしているのである。

以上の議論の哲学史意義を明らかにするためには、この議論を機会原因説や予定調和説とは異なる仕方で「世界の統一」の問題に応答するための議論として位置づけることが不可欠である。「第三類推論」をこのように位置づけることの正当性は、「そこにおいてあらゆる現象が連結されているはずの世界全体の統一 (Die Einheit des Weltganzen) が同時存在するあらゆる諸実体の相互作用という密かに想定された原則の単なる帰結であることは明らかである」(B265Anm.) という「経験の類推」の末尾の注の記述からも保証される。とはいえ、「世界の統一」の問題に関する議論として考察した場合、「第三類推論」には、どのような特色があるのだろうか。

一つ目の特色としては、「第三類推論」では、空間・時間において現存する実体が主題とされていることが挙げられる。この実体概念をカントはしばしば「現象的実体 (substantia phaenomenon)」と呼び、「物質 (Materie)」と同一視している (Vgl. B 186; B321; B589)。しかし、この「現象的実体」はライプニッツやバウムガルテンの実体概念とは大きく異なる。というのも、彼らは、空間・時間において延長を持つ物体は、無数のモノド=単純実体の集まりが一つの複合体、あるいは実体とみなされた結果生じる現象、つまり、「実体化された現象 (phaenomenon substantiatum)」だと主張したからである<sup>5</sup>。この実体論に依拠して、彼らは、あくまでも、空間・時間的位置を持たない無数の実体の一つの世界をなすための根拠として予定調和説を支持しているのである。したがって、空間・時間的位置を持つ「現象的実体」相互の関係の可能性を論じている点に「第三類推論」の独自性を見ることができる<sup>6</sup>。

二つ目の特色として、「第三類推論」では、複数の実体が相互に関係しあうためには神が不可欠である、という多くの近世哲学者が保持してきた前提が廃棄されていることが挙げられる。例えば、予定調和説の支持者は、自存する諸実体の諸状態が、あたかもこれらの実体の一つの全体をなすかのように調和していることを根拠づけるために、神の概念を用いていた。さらに、前批判期のカントでさえ、この前提を共有していた。この点は、『就職

---

<sup>5</sup> ただし、「実体化された現象」は、おそらくヴォルフ学派に特有の術語である。バウムガルテンは『形而上学』193項で、「偶有性が自存するものとしてみなされた場合、この偶有性は「実体化された現象」(phaenomena substantiata)である」(X XVII 67)と述べている。その上で、同書295項と296項では、物質と物体が「実体化された現象」と呼ばれている (Vgl. XVII 92)。こうした議論が、ライプニッツ的な現象-モノドの二元論に依拠していることは明らかであろう。

<sup>6</sup> 従来の研究における両概念の混同を批判しつつ、バウムガルテンの「実体化された現象」とカントの「現象的実体」を的確に区別し、その区別の意義を論じた研究としては、嶋崎太一、「物質は substantia phaenomenon である—カント自然科学論における実体の問題—」、『日本カント研究 15』、日本カント協会 (編)、知泉書館、2014年、162-176頁がある。

論文』20項の「したがって、宇宙を構成する諸実体の連関における《統一》は、全ての実体が一なる存在者に依存していることからの帰結である」(II 408)という記述からも裏付けられる。前述のように、この著作で、カントは、従来の「物理影響説」の欠陥を改善するために、自存する複数の実体が相互に関係しうするための可能性の条件を提示しようとした。しかし、その可能性の条件を神とみなした点で、カントの議論は近世哲学の伝統につらなる保守的なものだったのである。

これに対し、「第三類推論」においては、諸実体が相互に関係しあうための可能性の条件が空間だとされている。この点は、『純粋理性批判』の「原則の体系のための一般的注」において、カントがライプニッツの予定調和説を批判した上で以下のように述べていることから裏付けられる。「しかし我々は(現象としての諸実体の)相互性の可能性を、それらの実体を空間において、したがって外的直観において表象するならば、十分に理解することができる。というのも、空間は、(作用と反作用における、それゆえ相互性における)実在的外的関係の可能性の条件としての形式的外的関係をアプリアリにすでに自らのうちに含んでいるからである」(B293)。このように、「第三類推論」では、空間における無数の実体の共存と相互性のカテゴリーの諸対象への適用の二点が、「世界の統一」の条件とされているのである。

以上のことから、「第三類推論」には、伝統的な世界論との連続性と断絶の双方が含まれていることがわかる。確かに、無数の実体の一つの世界をなす根拠を探求している点で、「第三類推論」は、伝統的世界論と同じ問いを扱った議論である。しかし他方で、「現象的実体」概念の導入によって、実体の自存性という多くの近世哲学者が共有していた実体概念が放棄されてしまっているのである。

おわりに

本報告では、カントのメモと講義録、および『純粋理性批判』の「第三類推論」の分析を通して、①カントが世界を「系列」としてだけではなく、「複合体」という観点からも考察していたこと、②カントが無数の実体の一つの世界をなすことはいかにして可能なのか、という「世界の統一」の問題にどのように答えたのか、という二点を明らかにした。

このことは、ライプニッツからカントまでの間の18世紀ドイツ哲学史を「モノド論の影響史」として統一的観点から論じるための足がかりとなる。前述のように、ライプニッツのモノド論と予定調和説も「複合体」としての世界の成立根拠を示し、「世界の統一」の問題に応答するための議論であった。そして、ヴォルフやバウムガルテンを初めとする18世紀のドイツの哲学者達は様々な仕方で予定調和説を受容・批判している。それゆえ、カントを含めた当時の哲学者の「世界の統一」の問題に対する応答を比較検討することは、従来体系的に論じられることがほぼなかった18世紀ドイツ哲学史の研究に寄与することにつながるはずである。